(1)　昭和52年6月5日発行　言論人　(昭和41年7月18日第3種郵

「反ソ」から「親中」への振子

＝危険な岐路に立つ日本外交＝

中嶋　嶺雄

ソ連の方こそ大きな誤解と破綻

一国の外交能力が、今日ほど死活的な意味をもつ時代はないのではなかろうか。今回の日ソ交渉を目撃して多くの人びとは、そのことを強く感じたにちがいない。そして、すでに多くの指摘があるように、戦後の日本において、国民が今回ほど一致してバックアップした外交交渉はなかったといってよい。政府も国民も、マスコミも世論も、与党も野党も、等しくソ連のやり方に憤慨し、反撥した。こうした潮流を「澎湃とわきあがるネオ・ナショナリズム」と表現した論者もあった。ようやく暫定協定交渉が妥結し、待ちに待ったサケ・マス漁船団が一斉に白波を立てて北洋へ向う勇姿が新聞やテレビで報道されたとき、多くの国民は拍手喝采したことだろう。だが、私自身は、その勇姿から、子供心に記憶のある真珠湾攻撃への出撃場面を連想してしまった。

もとより、今回の日ソ交渉を見ていた国民は、手をかえ品をかえて攻勢に出るソ連の理不尽な態度に怒り、同時に、優柔不断で先見性のないわが国政府の立場に苛立ったことだろう。ある経済雑誌は、「理念なき二〇〇カイリ外交の破綻」と銘打った論文を早速掲げていた。そして、多くの新聞論調は、ソ連の強硬な態度のまえで、なすすべを知らない日本外交をなじりながらも、国民感情を大いに揺ぶらせたのである。

そこに「一億火の玉」のような片鱗が見られたことも事実であり、大衆の情緒をかきたてて爆進する「対外硬」外交のパターンと同じものがあったことも否めない。私はどこか、数年まえのふってわいたような「日中友好」ムードと表裏のものではないかとさえ考えている。

「対外硬」的視点からすれば、今回は、たしかに「理念なき外交の破綻」であったろう。だが、いま少し冷静に事態を見つめたとき、ソ連のやり方はたしかにえげつなかったかもしれないが、その手のうちが、ガラス張りですっかりさらけだされたという点では、きわめて健康的でもあったし、日本外交は破綻どころか敗北したともいえないのではなかろうか。私は逆に、一見、終始、攻勢的であったソ連の方にこそ、大きな誤解と破綻があったような気がする。

「いぶし銀の味」が出た福田外交

まず第一にソ連は今回の漁業交渉がたんに日ソ関係に固有の懸案であるのみならず、二〇〇カイリ海洋時代への移行という グローバルな国際環境を背景にしていたことに勢いを得て、徹底した対日プラフ（威嚇）外交に出た。そのプラフは、「魚」と「領土」をリンケージさせて、押せ押せでくれば、「魚」の確保という点で背に腹をかえられない日本が「領土」で後退するか、あわよくばあきらめるであろうというものであった。だがソ連は、こうした外交交渉上のプラフにとどまらず、しばらく以前から、三カイリすれすれもしくはその内側でのソ連漁船の見せしめ的な操業や日本近海一円への海軍力の滲透によって、まさに砲艦外交まがいのプラフをかけてきていたのである。

だが、このようなソ連の対日プラフ外交にはやはり限界があったし、わが国もそれに屈しなかったことによって、ソ連側の「魚」と「領土」のリンケージ戦略は裏目に出たのである。

これにたいしてわが国は、ソ連の一方的攻勢に押されっぱなしのようでありながら、結果的には、日ソの外交関係のなかに「領土」を今日ほど色濃く定着させたことはなかった、という意味で、大きな収穫を得たといえよう。

つまり、ソ連の側の「魚」と「領土」のリンケージ戦略にたいしてわが国は、技術的ないしは戦術的には漁業交渉に徹し、従って、表面的には農林省主導型のポーズをとって「魚」と「領土」をあくまでも分離しながら、外交的ないしは戦略的には、「魚」と「領土」とはあくまでも一体であるという結果を引き出し、問題解決は外務省のもとでの将来の日ソ外交交渉によってしか得られないことを明白にさせたのである。この点で日本外交は大きな得点を記録したのであった。

少なくとも、一九七三年秋、当時の田中首相が大みえを切って「領土」をふりさげて訪ソし、ブレジネフ書記長によってひとまずはもなくクレムリンの壁にたたきつけられ、瞬時にして玉砕してしまったことにくらべれば、はるかに多くのアドバンテージを得たといえよう。福田外交の「いぶし銀の味わい」がようやく出てきたのかもしれない。

問題の整理と交渉台本が欲しい

だが、そうであればこそ、問題はこれからの対ソ外交にかかっている。そして、北方領土返還要求を「一億火の玉」となって叫び、こぶしをふりあげて怒ってみたところで、残念ながら、領土は返ってこないのである。ヤルタ協定がアジアの現代史にとって、いかに問題の多いものであり、日ソ中立条約を一方的に破って対日参戦したソ連がいかに信義に悖る相手でポツダム宣言を受諾し、さらにサンフランシスコ平和条約で千島を連合国にたいして放棄し、そのうえ当時の吉田首相（全権）がサンフランシスコ会議で南千島と北千島の歴史的経緯にふれ、そのときエトロフ（択捉）、クナシリ（国後）両島にもそれなりに言及しているという経過ののちに五六年の日ソ共同宣言があり、そして、わが国が第二次世界大戦の敗戦国であり、ソ連はヤルタの密約を楯にはすべて履行して、わずか一週間の戦闘で極東でも第二次大戦の勝利者となった以上、いまなお「北方四島を返せ」というのは、実際には偽善的であるか少なくとも非現実的であり、日ソ関係の安定ひいてはアジアの平和を望まない者の妄言であるか、ためにする戦略戦術であるかのどちらかであろう。この辺の問題の整理がまず必要であり、そのうえで わが国は、対ソ交渉のシナリオをいくつか書いてみなければならない。

そのようなシナリオなくしてこぶしをふりあげているだけでは、もはや外交ではない。その場合、問題はたんに北方領土問題だけでなく、朝鮮半島の将来や台湾の将来の問題も含んで、広く東アジア全体の安全保障の問題のなかにこそ存することを認識すべきであり、北洋漁業に依存しすぎているわが国の食糧戦略（たんぱく質源）の長期展望を楯（たとえばオーストラリアやニュージーランドからの食肉輸入の問題を国内の圧力団体を説いて早急解決することは、食糧戦略のうえからも、対ソ交渉にそなえる長期の外交戦略のうえからも、日豪関係の強化によるわが国のアジア・太平洋外交の増進という点からも緊要である同時に、チュメニ油田を中心とするシベリア開発への参加を、あえてアメリカぬきでも積極的に再検討し、そのことによって逆にソ連の対日依存度を高めるなどの多角的な構想が有効かつ必要であろう。

醒めた国際的感覚の涵養が必要

こうして敏感的に開かれた外交を多元的に展開することこそ、いずれにせよ深度国際化時代を担わねばならないわが国の安全保障と生存の戦略なのではなかろうか。

それなのに、一部には、最近の反ソ感情をテコに、この際、一挙に中国と連携し、懸案の日中平和友好条約を一日も早く締結し、ソ連が「覇権主義」であることを確認しようではないかといった短兵急な選択への衝動があるのには驚かされる。

しかも、日ソ関係がこのようにホットな時期に、一挙に日中関係を強化して、ソ連に当ろうといった発想が、一部の野党ならいざしらず、若干の外務省OBなどにも見られるのである。先日も中国の招待で訪中したある外務省OBは、華国鋒体制の中国が良いことづくめであるかのように浮かれっぱなしで、そのうえソ連の「覇権主義」を激しく非難して、日中平和友好条約の早期締結を訴えていたが、このような態度のなかには、中国がなぜ現時点で日本の北方領土返還要求をこれほど強く支持するのか、国内的には北京政変以来八ヵ月、いかなる組織的・制度的認知をもいまだに受けていない華国鋒政権が、なぜ日中平和友好条約を急ぐのかといった点への分析が欠けているばかりか、アジアの将来や日ソ関係の将来への展望もなく、知らずか知ってかいまも完全に主体性を欠如した「親中派」になってしまっているのである。最近中国を訪れたA紙社長の立場も、先頃の社会党訪中団の立場も同様であった。

しかし、対ソ強硬外交の裏返しとしてのこうした対中軟弱外交はソ連の傍若無人の世界戦略にたいする冷戦時代的ないしは十九世紀的パワー・ポリティクスの単純かつ条件反射的な対応でしかなく、東アジアの一角において、アジアの責任ある指導力としてのわが国がとるべき外交選択としてはあまりにも古くさい危険な選択だといわねばならない。われわれにとっては、いまこそ柔軟で迂回的なソフト・ウェアの外交戦略のなかに、わが国の長期的な生存の戦略を見出してゆかねばならないのである。

復古的な戦時教育への憧憬に凝り固まっていた前文部官僚が、「毛沢東思想」による集団主義教育に感動してすっかり「親中」になってしまったのと同様「反ソ」タカ派の前外務官僚が中国を天国のように称讃して「親中」になるというわが国民の一部に固有な精神構造からの訣別と、それらの時代錯誤的な言論にまどわされないだけの醒めた国際感覚の涵養こそが、わが国の将来にとっては必要なのである。

（東京外語大学教授）

ベトナム難民の背景

二ヵ月間で三〇〇人もの難民が、日本に上陸しているそうだから、この事実を報道しないわけにはいかないだろう。

またこういう難民に対して、人道的処置をとれという論評が出はじめたことも、一応は歓迎すべきことだろう。マスコミの「そら涙」というのはなかなか曲者で、二枚舌を使ったり、人道主義に階級的区別をつけたりすることが多いのだが、だからだと思う。ベトナム戦争が終盤期であったころですら、南ベトナムから海外への大量難民という現象はなかった。それどころか、戦火をよそに悠々と水田で働く農民、というすべきことだろう。マスコミの「そら涙」というのはなかなかの大量難民という現象はなかった。それどころか、戦火をよそに悠々と水田で働く農民、というすべきことだろう。マスコミの「そら涙」というのはなかなかの曲者で、二枚舌を使ったり、人道主義に階級的区別をつけたりすることが多いのだが、だからだと思う。ベトナム戦争が終盤期であったころですら、南ベトナムから海外への大量難民という現象はなかった。それどころか、戦火をよそに悠々と水田で働く農民、というすべきことだろう。マスコミの「そら涙」というのはなかなかの曲者で、二枚舌を使ったり、人道主義に階級的区別をつけたりすることが多いのだが、だから

そうなると難民という現象から見るかぎりは、南ベトナムの人々にとって〝戦火におののい、

今や多くの「新経済区」は掘っ立て小屋の並ぶスラムと化しているという。

その他、失業者は三〇〇万、インフレ率は五〇パーセント、ニワトリ一羽が二〇ドンで月給の半額分、乞食、売春婦、ヤミ市までもあるのだそうだ。かく

覆水盆に返らずで、いくらナイゴンの苦悩を嘆いてみても、今さらどうなるものでもないことは承知している。しかし、少なくともベトナム戦争を民族主義の戦いと定義づけることだけは、もう払い下げにして欲しいことである。